

司会後記

シンポジウムの重さは測れるか？

—Smokeを手がかりに—

白 岩 英 樹

序.

1月に阪神・淡路大震災、3月に地下鉄サリン事件が発生した1995年。バブル経済が崩壊し、いまから思えば「失われた30年」の薄闇を着実に歩み始めていた日本で、1本の映画が公開された。タイトルは*Smoke*。監督はウェイン・ワン、原作・脚本はポール・オースターの手になる作品である。

作品冒頭、ブルックリン葉巻照会の店主オーギーと常連の客たちが雑談を交わしているところへ、小説家のポールがやってくる。そして、愛煙家であったサー・ウォルター・ローリーとエリザベス1世との賭けにまつわる逸話を紹介する。その賭けの内容とは、煙草の「煙の重さを測る」ことは可能か？（Auster 31）

1. 「いま、ここ」を生きるために

銀行強盗の流れ弾で妊娠中の妻を胎児もろとも失ったポールは、それまで3-4冊の作品が出版されているにもかかわらず、ここ2年半はなにも書けずにいる。どうやら、妻子の死から「立ち直る(recover)」ことができずにいるらしい。彼らの死を受け容れるには、夫として、さらには父として存在しえた自分自身の「遺体を回収する(recover)」ことが避けられない。つまり、どこにもない場所(nowhere)のために「いま、ここ」(now here)を手段に貶めるのではなく、目的として取り戻す(recover)必要がある(堀田 11)。

物語は、そんな彼が他者の「回復／遺体回収(recovery)」のプロセスに立ち会うことで、自らも徐々に“recover”する過程を描く。その際に重要な役

割を果たすのは、旧弊の価値観に揺さぶりをかける存在としての「若者たち」である（ヨース・ジョエルの論考参照）。*Smoke*では、母を交通事故で亡くし、「生き残り（survivor）」としての父を探す黒人の少年ラシードとの交流が、ポールに変化をもたらす。

墮ちるところまで墮ちざるをえなかった自分自身の「回復／遺体回収」を迫られているのは、ポールだけに限らない。伯母の家から家出をし、父を求めて彷徨するラシードもまた、自分自身の「回復／遺体回収」を渴望している。彼の伯母から事情を聞いたポールは「弱者（the weak）」としての自我から徐々に脱却し、「より弱い存在（the weaker）」としてのラシードを気にかける／ケアする（care）ようになる（白岩 69）。いわば、“care”の対象を自分自身に限定することで「鬼に憑かれし者」と化していた状態から、「いま、ここ」で痛苦にあえぐ「より弱い存在」へと「ハズレる力」を、少年ラシードから授かるわけである（堀田 10-11）。

かといって、その後のポールとラシードの「回復／遺体回収」が滞りなく進行するわけでは、もちろんない。ラシードのまえから12年前に姿を消した父サイラスもまた、相当な苦悩を抱え続けたことは想像に難くない。自らの運転が引き起こした事故でラシードの母親を死なせた罪の意識、息子のラシードを置き去りにした疚しさ。「いま、ここ」を生きるための「回復／遺体回収」を切実に欲していることは、ポールやラシードとなんら変わらない。

2. 「未来志向」の関係性

ラシードはついに父の居所を突き止めるものの、新たな妻子とともに家庭を築いていたサイラスの姿を目の当たりにして、激しく葛藤する。その主因は内面化された家族像に由来する。彼らにとって自分は邪魔者なのではないか、けれどサイラスが自分の父親であることも疑いようのない事実だ……。

ラシードとサイラスの立場や世代を超えた葛藤はやがて限界を超え、取っ組み合いへと展開する。因習的な価値観にとらわれた状態、つまり「知の過疎」を乗り越え、「多様な価値観」を享受しあうには、自他の価値観を交錯させることが欠かせない（作野 7）。それに加え、ラシードとサイラス父子そ

それぞれの価値観が交わるにあたり、ファシリテーターとしての役割を果たしたポールとオーギーの存在も看過してはならない。自他の必然を未来志向の価値観で架橋しあい、相互に関係性そのものとして包括的に捉えることが出来て初めて、お互いの生を「ポジティブなものにできるのではないか」(中村茂生の論考参照)。

罵りあい、慟哭しあったラシードとサイラスは落ち着きを取り戻し、継母ドリーンに抱かれるジュニアを挟み、同じテーブルにすわる。するとラシードが、ドリーンに抱かれるジュニアの頭へゆっくり手を伸ばし、「そっと撫でる (caress)」。それを見たドリーンは安堵したように、そしてサイラスの覚悟を促すかのように、彼の顔を見つめる。サイラスもまた、新たな家族のかたちを受容することを決心したかのように、葉巻に火をつけて、吸い込む (Wang 1:28:45-1:29:00)。この世に存在しない者として遠ざけ、葬り去ったはずのお互いの「遺体を回収する」ことで、ラシードとサイラスは新たな人生を歩み始める。

3. 「標準信仰」を揺さぶる物語

固定化された家族像からラシードが脱却するにあたっては、ポールのいかにも小説家らしい語りが必要な役割を果たす。それは次のような逸話である——<ある若い男がひとりでアルプスへスキーに出かけたところ、雪崩に呑み込まれた。しかし、「彼の遺体は回収されなかった (his body was never recovered)」(Auster 99 イタリックは引用者による)。男の息子は当時まだ幼かったが、大きくなると父と同じようにスキーをするようになった。冬のある日、ひとりで山へスキーに出かけ、ふと目を落とすと、足下に氷漬けになった死体があることに気づく。よく見ると、鏡をのぞきこんでいるような、自分自身を見ているような錯覚に陥った。というのも、傷ひとつない自分の似姿が氷のなかに閉じ込められていたからである。彼はそれが自分の父親だと悟る。ただ奇妙なのは、自分よりも父親のほうが若いこと。彼は父親が亡くなったときの年齢をすでに追い越していたのだった。>

聞き入っていたラシードは、ポールが話し終えても、じっと黙ったまま目

を伏せる (Wang 59:34-59:47)。これまでの経緯や表情、仕草からすると、彼の胸中に去来しているのが、父親との関係であることは察するに難くない。「標準信仰」に基づいて固定化された彼の親子像や家族像が、ポールの語りによって大きく揺らいでいる (青木 118)。事実、続く場面で両者が訪れる「個人書店 (independent bookshop)」では、書店員エイプリルに向かって、ラシードが「わたしが彼 (ポール) の父親なんです (I'm his father)」と冗談を飛ばし、ポールも彼のジョークに応じている (Auster 100-104)。

「標準信仰」から逃れる契機が小説家による物語であったことはきわめて示唆的である。というのも、物語を語ること自体が「意識の下部に自ら下っていくこと」であり、「心の闇の底に下降していくこと」だからである (村上 175)。そのようにして共有された物語によって「我々は地中で、日常生活という硬い表層を突き抜けたところで、『小説的に』繋がって」いる (村上 255)。付言すれば、久方ぶりに書き上げた短篇小説をポールが読んでほしいと頼みに行く先も、書店で働くエイプリルである。*Smoke*において、書店や物語・本は、「魔法の世界」さながらの新たな価値観を生み出し、それによって自他が関係を結び直す「善きもので、信頼に足る存在」として描かれている (古川)。

結.

最後に冒頭の問いへ戻ろう。煙草の「煙の重さを測る」ことは可能か？
*Smoke*ではポールによって以下の工程が明かされる。

- (1) 新しい煙草の重さを測る (2) 煙草に火をつけて吸う
(3) 灰と吸い殻の重さを測る (4) (1)から(3)を差し引く。

それでは、本稿のタイトルに掲げた問い——シンポジウムの重さは測れるか？——はどうか。録音も録画も残していないがゆえに、煙草の煙さながらに消えたシンポジウム。上記の工程に司会の役割を当てはめれば、次のようになるかもしれない。

- (1) シンポジストを紹介する (2) 対談を進行する
(3) 本稿を執筆する (4) (1)から(3)を差し引く。

だが、ここでひとつの疑問が生じる。そもそも、標準化されたものさしで計測することが、特定の現象の把握につながるのでしょうか。もちろん、理解の一助にはなるかもしれない。が、煙草を吸うことも、シンポジウムに参加することも、その本質は経験にこそ由来する。風味を堪能したり、感情や思考に身をゆだねたり、体験を味わうプロセスは個々に応じて異なり、標準化されたものさしなどで計することは不可能である。

先述したように、我々は一元化された「記録 (record)」を有していない。が、だからこそ、多元化された個々の「記憶 (memory)」を辿ることが出来る。共感を覚えたり、言葉を交わしたり、違和を感じたり、視線を合わせたり。そのような体験が豊饒かつ雑多に交じり合った時空間は、煙と同じように儂くとも、まちががなく我々の記憶に残り続ける。意識・無意識を問わず、我々はあの日の「回復／遺体回収」を重ねながら、自分自身の生を生き続けることになろう。シンポジウムの重さは、我々が築く「未来」のかたちにかかっている。

【映像資料、引用文献リスト】

Wang, Wayne. *Smoke*, Miramax, 1994.

Auster, Paul. "Smoke" in *3 Films*, Picador, 2003.

青木真兵「下野の倫理とエンパワメント」内田樹編『撤退論——歴史のパラダイム転換にむけて』（晶文社、2022年）

作野広和「これからの過疎地域が歩むべき道——『縮充』社会の構築」『自治実務セミナー（2023年8月号）』（第一法規、2023年）

白岩英樹『講義 アメリカの思想と文学——分断を乗り越える「声」を聴く』（白水社、2023年）

古川佳代子「私の一冊（2020年1月27日）」『とさちょうものがたり』

<https://tosacho.com/furukawakayoko-2/>（2023年8月18日アクセス）

堀田新五郎「学びの究極——鬼を脱落させる術の習得」奈良県立大学地域創造研究センター撤退学研究ユニット編『山岳新校、ひらきました——山中でこれからの生きる「知」を養う』（H.A.B、2023年）

村上春樹『職業としての小説家』（スイッチ・パブリッシング、2015年）